

『風に紅葉』解釈覚書き（一）

A Note for the Interpretation of “Kaze in Momiji”

北 口 いく恵

中世物語『風に紅葉』は、宮内庁書陵部蔵「かぜに紅葉」が唯一の伝本であり、夙に『桂宮本叢書 十七 物語三』に収められ、近年、『鎌倉時代物語集成 二』にも所収されたものの、両者は本文のみで、物語の内容にまで深く立ち入ることができなかった。

しかし、最近、辛島正雄氏の手によって、本文校訂とともに詳細精緻な頭注が付されて、この物語についての読解は急速に進展したように思われ、しかも、卓越した辛島氏の見解には多くの学ぶべきものがあり、これによって本物語のよみが一層飛躍していくことは明らかである。しかしながら、弧本であるという書誌的制約があり、主として本文が平仮名書きであるが故に、これらの先行の三つの翻刻でも表記上の相違がみられる。本稿は、それらともなう若干の解釈上の問題点について考察を試みるものである。

以下、紙幅の関係上、底本の宮内庁書陵部の本文をもとに、問

題点に傍線を付し、写本本文のよみ、漢字の表記、語釈の項目に分けて試解を示した。先行本文はそれぞれ『桂』『集成』『辛』の略称を用い、所収ページを明示した。

一、写本本文のよみ

1. のんすいみづはるすみ物なり (二二ウ)

承香殿女御の苑庭の描写本文である。傍線箇所は、『桂』は「はし」(二七四頁)、『集成』は「いし」(四五五頁)、『辛』も「石」(二五頁)とあって、相異なる本文となっている。

「たたずまひ」は、「立っている様子。ありさま。かたち。」(小学館『古語大辞典』)の意で、人の様子にも用いるが、「水の色、石

のたたずまい庭の面、梢のけしきもいみじう面白し」(『浜松中納言』二)、「艶ある園を造りなし、山のたたずまる木深く、池の心ゆたかに」(『増鏡』五、内野の雪)などのように、園庭の立石、岩に関する用例も多く、ここはやはり「いし」と解するのが正しいと思われる。ちなみに、『源氏物語』には「山のたゝずまひ」(「帚木」)、「庭のたゝずまひ」(「賢木」)、「石のたたずまひ」(「胡蝶」)、「石などのたゝずまひ」(「梅枝」)とあって、いずれも庭園の描写であり、「階(はし)」の例はない。

元来、仮名の「い」と「は」は誤りやすく、『古典の批判的處置に関する研究』の中で、混同を生じやすい平仮名の事例にもあげられており、「みつのほとりのいしに」の「いし」を「はし」とする写本の例もある。

同様に、「なけきいひ給ながら」(二四オ)、「御身のほどのいつかしさをばうちをきて」(二四オ)をいずれも『桂』が「い」を「は」と読んでいる点は辛島氏も翻字の異同で指摘されている。特に後者は妻一品の宮が帝の娘という自らの身分の尊さをさておいて主人公にただ付き従おうとしているのがいとおしいという一文であるため、「厳しさ」とよむべきで、「はづかしさ」とした場合、一品の宮の身分がこちらが恥ずかしいと思うほど立派ということになってしまい、一品の宮の母の甥が主人公であるという縁戚関係にある夫婦であることからふさわしくなく、この意味からも「い」とよむ方がよいと考える。

2 いづくのうらにても、御いのりはをこたるましくなん (二八九ウ)

『桂』は「いづくのうらにても、御いのりはをこたるましくなん」(二八五頁)、『集成』は「いづくのうらにても、御いのりはをこたるまじくなん」(四六三頁)、『辛』は「いづくの浦にても、御祈禱は怠りきこゆまじくなん」(二六六頁)とし、「底本』をこたる(きこゆー傍記)ましく」と読めるので、傍記をいかし、『る』は『り』の誤写と見た」と頭注を施している。いかにも写本では「をこたる」の「る」の右傍下に「きこゆ」とよめる本文より小さな文字があり底本の祖本には「をこたるましく」以外の何らかの本文があったことを窺わせる。『桂』にはそれが傍線で「みゆ」と示してある。かりに「きこゆ」であったとしたならば、『辛』の頭注のように「をこたるきこゆましく」とよめるが、できるだけ底本を尊重しつつもより文法に即した本文を確立したいという意味から、「り」と校訂してしまうのは如何であろうか。

3 いづくのうらにても、御いのりはをこたるましくなん (二八九ウ)

『辛』は「笑ひきこえたまふは」(二八頁)とし、「前後とも大將の詞であるが、それを繋ぐ『わらひきこへ給は』のすわりが悪い。『は』は衍字か。『て』などの誤写か」と注されている。

主人公は住吉で甥にあたる女装した若君を見いだし、あまりの美しさに溺愛する。この一文は、主人公が妻と、妹の宜耀殿女御

のどちらが美しいか若君に尋ねたところ、妹が美しいと答えた若

君に対して、『うつほ物語』の仲澄の侍従のまねをしようとして
いるのだろうか、若君をあまり得意に思っているうちにばか者に
育てあげてしまうと思われる、と冗談をいう場面である。「笑ひ

きこえたまへば」とよめば文意が通じるかと思うが、続く次の会
話も主人公の言葉であるため、続きが悪い。

この文の前後は会話文が続き、余分な説明を省いて「のたまへ
ば」「聞こえたまへば」「申したまへば」を繰り返すことによつて、
テンポが早く、いきいきとした会話表現になっている。

4 *えいしるるるる*

(二二〇)

北口いく恵

3に続く場面で、主人公が退出したあと、宜耀殿女御のもとで
眉つくりをしてもらい、甥と叔母とはいうものの、春宮の女御の
手をなめまわしたり、共寝をしたりという天真爛漫というよりは
子どもとはいえ、美を好むわがまま放題の若君の様子が描かれて
いる。この場には女御と若君しかおらず、写本は確かに「宮」と

よめるが、『辛』の注に「底本『宮』とあるが、一品の宮はこの
場にはないので『君』の誤写とし、若君と解する」というように、
文脈上は「君」が正しい。「君」と本来あった文字を「宮」と誤
ったとも考えられる。

5 *おほしとかむ御事なれば*

(二九〇)

『桂』は「おほしとかむ御事なれば」(二九四頁、『集成』は「お
ほしとがむる事なれば」(四七二頁、『辛』は「思しとがむる御事
なれば」(三七頁)とし、「底本』とかむ御事』を『とかむる御事』
と改訂」と注する。

朱雀院(帝)の妹の前斎宮は、「神よりはかの契りむすばじ」
と誓い、斎宮退下後はただちに髪をおろし仏道修行しようとし
た。琴の名手である故、主人公邸に出入りするうち、あろうこと
か主人公に心惹かれてしまい、妻一品の宮も気づくほどで、そこ
でこの主人公の言葉となる。写本は『桂』『辛』の指摘のように、
「とかむ御事」とよめる。主人公自らの言葉であるので、『集成』
のように「とがむる事」とあってほしいところだが、2と同様、
文法から本文を改訂することに疑問を感じる。「とがむ」は下二
段活用であるが、中世頃から下二段と四段活用の混同が考えられ、
終止形と連体形が同じ形になっているのではないだろうか。

6 *こきりおほしとかむ御事なれば*

(二九〇)

『桂』(二九四頁、『集成』(四七二頁)ともに「宮」、『辛』は「色」
(三七頁)とする。「色」ま、「宮」まと写本ではこのような字
があげられ、よく似ているが、『辛』のとおり、やはり「色」で
あろう。

5のすぐ後に続く文で、主人公が、「なるほど魔縁の仕業と思
われる。私がこれほど艶も情愛もなく、女というものを恐れて行

みのように描かれている前齋宮だが、「さかりすぎ」では年の盛りが過ぎた齋宮自身の言葉のようになってしまう。ここは、『伊勢物語』の齋宮に魅せられた狩の使の話から、在五中將の好色の心がけも場合によっては出てくるかも知れないと思つて参上しました」とからかい半分に言い寄つて前齋宮の心迷いを諭そうというのであるから、「まかり」とよむべきであらう。

9 こゝかなふまでは「こゝかなふまでは」(四七七頁、『辛』「こゝかなふまじくは」(四三頁)とする。

『桂』『集成』ともに「こゝかなふまでは」(四七七頁、『辛』「こゝかなふまじくは」(四三頁)とする。

北口 承香殿女御の里邸を訪ね、西の対からの琴の音にひかれて可憐な女を見いだす場面。女御の異母妹で、主人公が「これやまことの恋のみちならん」と、自分から唯一積極的に愛した女性である。

『辛』の頭注にあるように身分の低い女と見て強引に戸をあけようとする主人公故、「こゝ」を「こと」の誤写と考へてもよいところである。「まじく」は「まじく」(三二ウ)、「まで」は「まじく」(三オ)のように似た書写がみられるが、ここも辛島氏の指摘されるように「まじく」とよめる。

10 桂は「いさらせ給へ」(四八四頁)とある。『辛』は「いざさせたまへ」と本文を改訂し、注に「底

本『いさらせ給へ』であるが、『ら』は「ゝ」の誤写と見て、「いざ、させ給へ(さあ、いらっしやい、の意)」と解した」とする(五二頁)。写本を見ると、「はいさらせ給へしゝうの君」と傍書してある。

ここは、9の話の展開で、主人公が女君のもとへ通つてゐることを知り、嫉妬した承香殿女御に邸から追い出された姫君が東山の尼上のもとを訪ねる場面である。ところが、三輪へ旅立ったところなので、「さあお出かけなさい」と勧めるのであるから、底本のまま「ゐざらせ給へ」としても文意が通じるのではないだろうか。

二、漢字の表記

11よをもへたてそはめたる御事のましらぬそあらまほしうねんなきともいひつへき (三三ウ)

非常に仲睦まじい夫婦仲の主人公と妻の描写であるが、「世」として男女の仲の意とするか、辛島氏のように「夜」(『辛』四頁)の字を当てて夫婦の仲と解するか、二とおりの解釈が考えられよう。

妻の一品の宮が女兒を出産した場面では、「母宮もくしきこゑ給てしはしをはしませはれいのたちさるかたなくてさふらひ給を

とこ君の御さまめやすし」(四ウ)と、片時も離れたい主人公の様子が触れられていることからしても、「夜」と解するのは言い過ぎではないだろうが、そこまで限定しなくても一般的な男女の仲をさす「世」でよいと考える。

12やなきのきぬにえひそめのこうちきゝたる人ははしをうしろなるかみのかゝりうしろていうなるもてなしけはひうへなんめり
(八ウ)

琴を弾き合わす音が聞こえる叔父の太政大臣邸を主人公が唐垣の間から垣間みる場面で、太政大臣の妻の描写である。「辛」は本文を「端」として、「簀子に背を向けて、部屋の内に向いて座っているのである」と注されている(二〇頁)が、「うしろなる髪のかかり」「後手優なるもてなし」とあることから「階」と解し、「階段を後ろにして」という解釈も可能であろう。

13をれかへりわかひてみえたまふそみるめにはたかひてうけられぬ
(八オ)

梅壺女御の描写だが、『辛』は「癡」の字を当てて、「愚か」と同根の話と解されている(二〇頁)。また、この後文に「おれ返たる御けしきそ人の御ほとには似すおほえ給」(二〇ウ)と将来は中宮にまでなる女御の身分にふさわしからぬ愚かしい様子が描かれているので、「癡」の字でよいかと考える。一方、「折れ返る」で、

くねくねと折れ曲がり、落ち着きのない態度をさす意にもとれないだろうか。

14とう行ちうしんの思ひなしといひ
(二五ウ)

『集成』「とう行ちうしん」(四五九頁)、『辛』「東門中心」(二九頁)。

二度目の出産に苦しむ妹の宜耀殿女御の祈禱をしてもらうため、主人公が功德の聖を難波まで迎えに行く場面で、四天王寺に着いたところである。

確かに写本には「とう行ちうしん」とある。引き連れて一緒にいく同行の志の「同行衷心」あるいは「同行重臣」かとも考えられるが、『辛』の注に、「行」は『門』の誤写であろう。(以下略)」とあるように、「行」を「門」の誤写と見た場合、四天王寺の西門信仰と結びつく。日想観をふまえ、四天王寺西門は海を隔てて極楽浄土の東門に通じているという信仰は、末法思想の流行にもなってきたかになり、西門周辺には多くの人々が難波の海に沈む夕陽の荘厳を見て阿弥陀来迎を願って集まった。西門前の鳥居には「四天王寺御手印縁起」に依拠して、「釈迦如来 転法輪所 当極楽土 東門中心」の文字を銅板で切抜き鍍金した扁額が掲げられ、裏面に嘉暦元年(一一三二六)の镌刻があるので、これに従うのが順当と思うが、誤写と考えるしかないであろうか。

15あけのたまかきかみさひてさこそはけんてうなるらめとま
ことにしんもをこりぬへし
(一五ウ)

14の四天王寺から住吉にいる高僧を訪ねていくところである。
傍線部、『集成』「げんでう」(四五九頁)、『辛』は本文に「現兆」
の字をあて、注に「神仏が目の前に靈験を示し現れること」とし、
「これだからこそ、神が示現するのだらう」と訳されている(二
〇頁)。住吉信仰の示現と結びつけられればこれでもよいが、「嚴重」
の字も考えられよう。

「嚴重」は「げんぢゅう」とも「げんぢょう」ともいい、『時
代別国語大辞典 室町時代編』によれば、「神仏の靈験があらた
かで、祈願したことがまさにそのとおりに実現されるさまである
こと。」がこの場合の意であろう。「とりはき人おあづさにかけて
くちよする事、神べんふしぎけんてうのみこにて候」(短編_{II}古活
字本花鳥風月)「是はみな御願けんてうのよしきこしめして、公家
より勅使を立らるゝ儀にて侍るとかや」(相国寺塔供養記_{応永六、九、十}
五)の用例があげられている。また、角川の『古語大辞典』によ
れば、「漢語。威嚴があつて他を畏伏させるさま」とある。「嚴重」
〔黒川本字類抄〕「嚴重」〔伊京集〕「これをどろきて資賢卿に語りて、
あさまれける夢に思ひ合はせられて、人々けんてうなる由を申合
ひたりき」〔梁塵秘抄口伝抄・一〇〕「臨幸のけんてうなる事も侍ら
んに参りあへらば」〔増鏡・新島守〕の例があり、「けんてう」「げ
んでう」の表記がみられる。

本物語には「けんてう」の語がもう一例みえる。若君の教育係
をしていた式部大輔と弁の乳母を無理に結婚させようと乳母を部
屋に閉じ込めた大將のはからいを「なへてはかゝる御はからひの
けんてうさもはしたなかるへきを」(二〇ウ)と乳母が憤慨する様
子が書かれている。ここは『辛』も「嚴重」(二七頁)の字を用い
ているが、この場合の「嚴重」は、警護などかいかめしくきびし
い様子意味する語であろう。意味は異なるがどちらも「嚴重」
の字を用いてもよいと考える。

16けちえんにちよくし所たうしてまいらまほしかりかと

(二九ウ)

8の語の前文に当たり、主人公に心迷う前齋宮に対して、伊勢
物語の狩の使をもじりながら、ちよつといい寄ってさとそうとい
う主人公のたくらみの言である。

『辛』は本文を「結縁に、勅使所たうして」(二八頁)とし、「た
うして」の注に『た』は『ま』の誤写か。「勅使所望して」とす
れば、伊勢神宮への勅使となることを願ひ出て、の意となり、下
との繋がりもよい」と記してある。しかし、文意から誤写と考え
るのも賛同しがたく、「勅使所」の意が不明だが、そこを通して
の意と考える他にないだろう。「和光同塵」「両界の作法」「魔縁」
「教化」など、この文のあたりにはこの時代の物語の特徴として、
仏教語や漢語表現が随所にみられる。

三、語釈(こつご)

17 念なし

『風に紅葉』と同様、中世王朝物語群の『恋路ゆかしき大将』の成立年代をめぐって、田淵福子氏は語彙の特徴から統計的に検討されている⁽⁶⁾。その中で「念なし」の語をとりあげ、小学館の『日本国語大辞典』により、①考えない、考慮しない。②無念である、口惜しい。後悔する。③容易である、たやすい、簡単である。④思いがけない、意外である。多くは期待していた以上の好結果の場合に用いる。⑤心残りが無い。という五つの分類に従って、その意味を分け、「①と②の意味は鎌倉初期から見えるものの、③は『古今著聞集』以後、④の意味は鎌倉末々南北朝期成立かとされる『風に紅葉』以後にならなければ見出せない」と成立年代の根拠にされており、『風に紅葉』の用例の三例のうち二例が④に当たると分類されているが、果たして本物語の場合、「好結果」とまで言える類例になるであろうか。

『風に紅葉』における「念なし」は、田淵氏の指摘のように三例ではなく、実は次のように四例みられる。

a 春宮の御なからひのやうはけしからぬまではあらずおほかたなに事にもしつまりたる御心くせにてかきりなうあはれにをろかならずは思ひきこへ給へりさこそあれよをもへたてそは

めたる御事のましらぬそあらまほしうねんなきともいひつへき(三ウ)

春宮の夫婦仲ほどひどくはないが、主人公と妻一品の宮の間柄も仲がよすぎるのは、立派すぎて面白味がなく残念だ。

b うへはなへてめつらしき人なとをときめかさせ給てそのうへかきりなき御けしきこそはへはへしう侍に春宮の御なからひはねんなくをはします(一四ウ)

これに先だって、「うゑはくまなうをはしましてうねへかきはまてもかたちをかしきをはこらむしすくさず御かたかたもあまたさふらひ給を」(三オ)のように後宮華やかな帝の描写もあつたが、春宮はこれ対して、まじめすぎて残念だというのである。

c なにかしかやうにくつをれたるねんなしにてはよもあらし(二一オ)

主人公のように意気地のない口惜しい者ではまさかあるまい。

d 水とりのやうに一つかひつつをはしまして御めもほかへ散らはやめもさめんにかしたにさなるまひそいとねんなし院のうへこそ猶をもしろうをはします(三一オ)

鴛鴦のように雌雄離れることなく、妻一人を熱愛しているのは面白くなく、朱雀院(帝)のように後宮華やかであるのが趣きがあつてよいとしている。

このように、本物語の作者は上流の位にある者が夫婦仲がよく、華やかな色恋沙汰もないというのは立派すぎて面白味がない、という考え方が随所にあらわれている。田淵氏が a d のどれを④の意と解されたのかは不明だが、いずれも謡曲や狂言で頻出する「念なう早かった」という形で使用される「好結果」と受け取れるものとはニュアンスが異なっているように思う。

18 れいのつまとのもとへはたゝすみより給える (四一ウ)

『辛』の注に『例の妻戸のもとへ』という言い方、不審(五頁)とある。しかし、これは「例の」とあるように前出の語を受けたもので、「くれかゝるほとにをはしたれはたゝいまのはなのゝきちかきつまとのうちへいれきこゑ給」(五ウ)という太政大臣邸を主人公が初めて訪れた場面を指す。

このように大將を「念なし」、帝を「隈なき上」、太政大臣の方を「梅の立ち枝」「うたたねの夢、仮寝」、若者は「身に添う影」というように、一人一人の常套語が頻用されていることに注目したい。このことから、「妻戸」とあると、太政大臣邸を意味するのである。

また、「例の」の語は本文中に二六例あり、このうち「大將うちよりまかて給けるまゝにれいのたちより給へるに」(八オ)、「よきほとにていて給やうなれとれいのしのひの御かよひはありけんかし」(九オ)、「れいのうたゝねのいくほとならぬよひのまはあか

すなかなかなれと」(二〇オ)の三箇所が北の方との逢瀬をさす語である。

19 大かたのあはれはかりたにあるをさすかわくるしたの御な
けきそひていうかきりそなきや (四八ウ)

一品の宮亡き後の若君の心中を書いたものである。『辛』(六七頁)の頭注には「人の死は、一般論でさえ悲しいというだけでも大変なものだから、この場合は、特別の人に言えない心の中の嘆き加わって。『わくる』は『取り分く』の意と見た」とある。仏道修行に励む間の主人公の不在を慰めるため、彼にしむけられたとはいえ、若君は彼の妻と関係をもったのである。このため、若君の子供を産み、すぐに一品の宮は死んでしまったのだから、人に言えない心の中の嘆きではある。しかし、この前文に「宰将中將はをとゝの御ありさまの心くるしさにはしめはたゝあきれたるやうに又こと事もおほえ給はさりしか心のしつまるまに」云々とあるように、次第に一品の宮を失った悲しみがわき起こってきたと見るべきであろう。そこで、「わく」は「見えなかったものが表面に表れる」意の「涌く」とみて、「世間一般のさみしささえあわれなのに、何と言っても湧き出る心の底の御悲嘆が加わって」と解釈したい。

おわりに

以上、先学の解釈の問題点をあげるのみで意を尽くせず、はなはだ荒削りな解釈の説明になってしまった。御寛恕のほどをお願いしたい。

再評価されつつある平安末期後の王朝物語ではあるが、いまだ研究は端緒にすぎたばかりである。まだまだ課題は尽きないが、本物語も結局、弧本をもとにしての宿命故、比較すべき異本がなく、本文校訂には限界がある。が、現存する宮内庁書陵部蔵本には、本稿の2・10にあるような補入が多数みられ、書写すべき他の本文があったことは明らかである。これらの書き入れの検討等、今後もさらに綿密な翻刻作業、語彙の検討等により、本文を確立するしかないであろう。今回、ふれることができなかった濁点、句読点等の問題などについては別稿を用意している。

註

- (1) 『桂宮本叢書 第十七巻 物語三』(一九五六年、養徳社)
- (2) 『鎌倉時代物語集成 第二巻』(一九八九年、笠間書院)
- (3) 「校注『風に紅葉』巻一」(『文学論輯』三六 一九八八年)、「校注『風に紅葉』巻二」(『文学論輯』三七 一九八九年)
- (4) 池田亀鑑『古典の批判的處置に関する研究 第二部』(岩波書店 昭和十六年) 三九一頁。

(5) 注(3) 卷二冒頭。

(6) 『恋路ゆかしき大将』の成立——その語句の特徴をめぐって——
 (『甲南国文』三二号)、(なお、大槻修氏『中世王朝物語研究』(世界思想社 一九九三年)にも「中世王朝物語の特異な表現・ことば」にも要約して所収してある。)